

# 第1章 福井地震災害の概要

## －戦災・震災・水災－

終戦前後の5年間は、日本列島大揺れの時代であった。1943（昭和18）年鳥取地震、1944（昭和19）年東南海地震、1945（昭和20）年三河地震、1946（昭和21）年南海地震、そして1948（昭和23）年の福井地震と、日本の中部以西で1,000人規模の死者をだす大震災が相次いだのである。戦中戦後の社会の混乱期は、また日本の大地の動乱期でもあったといえよう。

福井地震の発生は、1948（昭和23）年6月28日午後4時13分、福井平野の直下を震源とするマグニチュード7.1の地震で、福井市はほとんど壊滅状態となり、被災地全体で3,769人（「理科年表」による）の犠牲者をだすにいたった。地震の震源がきわめて浅く、しかも地盤の軟弱な沖積平野の真下で発生した地震であったため、地表は激甚な揺れに見舞われ、地震の規模のわりには、甚大な災害をもたらしたのである。

太平洋戦争の末期、1945（昭和20）年7月19日の深夜、福井市は米軍機による空襲を受け、市街地の9割前後が焼け野原になった。空襲による死者は、1,500人あまりと伝えられる。震災の翌月に終戦を迎えたものの、市民は食糧危機と物資不足に苦しむなかで、生活の再建と復旧に努めなければならなかった。そして終戦から3年近く、ようやく復興の目安がついてきた矢先の地域社会に、再び壊滅的な打撃を与えたのが福井地震だったのである。

被害は、福井、丸岡から吉崎にいたる南北約15kmの狭い範囲に集中した。森田町や丸岡町など、家屋の全壊率がほぼ100%に達した地域もあった。震源地の周辺では、激しい揺れが30～40秒も続いた。大半の家屋は、揺れが始まってから、5～15秒で倒壊したといわれる。

「福井震災誌」によると、人口8万6千あまりの福井市では、総戸数1万5,525戸のうち、1万2,425戸が全壊し、全壊率は80%をこえた。被災地全体では、家屋の全壊は3万5千戸あまりを数えたという。

震災から30年が経過した1978（昭和53）年に福井市が刊行した『福井烈震誌』には、当時福井市の若手職員で、のちに福井市長を5期務めた大武幸夫氏の地震体験記が載っている。

「この日は朝からどんより曇って蒸し暑く、何となくいやな感じのする一日であった。人々は窓を開け、少しでも外気を求めた。時に午後五時一四分（注：当時は夏時間を実施中）、学校の授業がすんだ子供達は喜々として戯れ、一日の勤めを終えた人々は、“ほっ”として家路を辿っていた。その瞬間、突如“ごおっ”という気味悪い音がしたかと思うと、大地は“ぐらぐらっ！”と大波の如くうねり、家も、人も、犬も、地上のあらゆるものは大地にたたきつけられた。橋という橋はいくつにも折れて河中に墜落し、進行中の自動車や電車はその場に横倒しになった。土煙で空は夕暮れのように暗くなり、余震はひっきりなしに続いて、正に地球最後の日を思わせた。地震と共に、市内各方面から火災が発生し、猛烈な勢いで全市に拡がった。

建物の下敷となって圧死する者数知れず、生きながら焼かれて死んだ人も少なくなかった」

戦後の復興とともに建てられた家屋は、耐震性が低く、そこへ激震が襲ったために、瞬時に多数が倒壊したのである。

さらに被害を拡大したのは、火災の発生であった。地震とほぼ同時に、福井市内だけでも 24 カ所から出火した。火はたちまち周辺に燃えひろがり、2,400 戸あまりが焼失した。木造モルタル造りの映画館が火に包まれ、観客ら数百人が亡くなったとも伝えられる。

市の中心部にあった鉄筋コンクリート造り 7 階建ての大和百貨店は、15 度傾いたうえ火災にも見舞われ、無残な姿をさらす結果となった。折から福井市を訪れていたアメリカ・ライフ誌の記者が、被災した大和百貨店を撮影し、その写真を同誌に掲載したため、一躍国際的に知られることとなり、福井震災の象徴と位置づけられている。

福井刑務所の建物も倒壊したため、収容されていた服役囚を、24 時間以内に戻るという条件つきで一時的に解放したが、59 人が戻らなかったという。

福井地震では、福井市がほぼ壊滅状態となったが、一方では、鉄道の被害も著しかった。上野発米原行きの列車が転覆したほか、2 本の列車が脱線転覆した。また、鉄道線路が波打ったり、蛇行するなどの被害を生じたうえ、九頭竜川にかかる鉄橋が落下した。そのため北陸本線は、地震から 2 か月間も不通になった。

この地域はまた、昔から繊維産業の盛んな土地柄だったが、地震によって多くの繊維工場が倒壊したため、経済的にも大きな打撃を受けたのである。

農業被害も甚大であった。水田からは水が飛び出し、用水路も決壊したため、水が補充できず、水田は干上がってしまった。また、地盤の液状化による噴砂現象などが多発したため、稲作ができない状態に陥った。

また各所で、液状化による地割れや陥没、泥水の噴出などが起き、福井市和田出作町では、水田で草取りをしていた 1 人の女性が、地割れに挟まれて死亡した。地割れによって死者がでたというのは、きわめて珍しい事例として、学会でも注目されたという。

坂井郡吉崎村の浜坂では、高さ 60m ほどの砂丘の砂が、地震動によって大崩壊を起こし、民家 13 戸を埋没、23 人の死者がでた。

地震動によって、九頭竜川や足羽川などの堤防は、1～5 m も沈下し、各所で亀裂や崩壊を生じた。これが、ひと月後の大水害を引き起こす原因となったのである。

地震から 1 か月近くを経た 7 月 23 日から 25 日にかけて、梅雨末期の集中豪雨が福井地方を襲い、山間部では、総雨量が 300mm にも達した。地震によって地盤がゆるんだり、ひび割れていたうえ、戦時中の乱伐によって山が荒れていたため、大雨とともに福井県嶺北全域で無数の土砂崩れが発生した。大野郡五箇村では、大規模な土石流も発生している。

九頭竜川、足羽川、日野川など、堤防の陥没が著しい箇所では、地震のあと応急的な復旧工

事も行われていたが、7月25日午後から激しさを加えた豪雨によって、九頭竜川左岸の堤防が決壊し、大出水によって平野はいちめん泥の海と化してしまった。九頭竜川だけでなく、足羽川や荒川なども氾濫し、溢れた水が市街地に流れこんだ。当時の福井市総面積の約60%が浸水し、総戸数の約40%が罹災したという。

これらはまさに、地震と豪雨による複合災害の様相を呈したのである。

福井地震による災害の状況を概観すると、地盤の性質によって被害の程度が異なっていることがわかる。とくに大きな被害となったのは、九頭竜川の下流域にあたる沖積平野で、地盤が軟弱なため、多くの建物や土木構造物に著しい被害がでた。福井市も、この沖積平野の上に発達していた。それにひきかえ、震源地に近い地域でも、地盤の固いところでは、建物の被害も比較的少なかった。

福井地震では、目に見える地表のずれは生じなかったが、地震後に行われた精密測量の結果、福井平野の東部で、長さ25km以上にわたって、北北西～南南東方向の断層運動のあったことが確認された。断層は左横ずれで、東側の地塊が、西側に対して相対的に最大約70cm隆起し、西側が南に最大約2m近くずれたことが明らかになった。この断層運動が、福井地震を引き起こしたのである。

内陸の直下で、活断層が活動することによって起きる地震は、震源が浅いために激しい揺れが地表を襲う。福井地震以前をみても、1927（昭和2）年北丹後地震（マグニチュード7.3）、1930（昭和5）年北伊豆地震（マグニチュード7.3）、1943（昭和18）年鳥取地震（マグニチュード7.2）、1945（昭和20）年三河地震（マグニチュード6.8）など、いずれも大災害をもたらしている。最近では、阪神・淡路大震災をもたらした1995（昭和30）年兵庫県南部地震（マグニチュード7.3）も、その典型であった。

福井地震によって壊滅的な災害となったことから、気象庁は、それまでは上限を6としていた震度階を改め、翌1949（昭和24）年、その上に震度7を設定した。基準としては、家屋の倒壊率が30%をこえた場合に、震度7を適用するよう定められた。その後の地震で、初めて震度7が適用されたのは、福井地震から半世紀近くを経て発生した1995（平成7）年兵庫県南部地震だったのである。

福井地震は、都市の直下あるいは近傍で、活断層が活動したときの脅威を見せつけるものであった。同様の事例としては、前述の鳥取地震や兵庫県南部地震などが挙げられる。2010（平成22）年1月に発生したハイチの大地震も、活断層が5m以上の横ずれ変位を起こした結果であり、首都が壊滅するという大災害になった。

わが国では、大都市の直下を活断層の走っている例が、少なからず知られている。大阪の市街地を走る上町断層、京都盆地の東と西をそれぞれ限る花折断層と西山断層、福岡市の繁華街を走る警固断層、仙台市直下を走る長町～利府断層など。将来、これらの活断層が活動すれば、

大規模で複合的な都市災害が発生することは疑いない。

振り返ってみると、1948（昭和 23）年の福井地震（死者 3,769 人）から、1995（平成 7）年の阪神・淡路大震災（死者 6,434 人）まで、地震動だけで、1,000 人はおろか 100 人をこえる死者をだした地震は、1 つも発生していなかった。つまり、1 つの都市が壊滅するような地震は起きていなかったのである。

いわばこの 47 年間は、震災の面からみて、日本列島静穏の時代だったといえよう。その平和の間に、わが国は高度経済成長の時代を迎えることになる。国土は飛躍的に繁栄を獲得し、都市は高層ビルの林立、地下空間の開発などにより、立体的に過密になって、福井地震のころには見られなかった都市環境が構築されてきた。

しかし裏を返せば、都市は繁栄の代償として、危険の蓄積に向かって、ひたすら走りつづけてきたといえることができる。そして、この半世紀のあいだに造られてきた建築物や土木構造物、さらには町づくりそのものが、いかに脆弱なものであったかを露呈したのが、阪神・淡路大震災だったと位置づけることができよう。

激甚な災害をもたらす内陸直下の地震を予知することは、現状では不可能である。起きるときは不意打ちになるものと理解しておかねばならない。それだけに、常時からの防災対策、とりわけ建築物の耐震性の確保や、避難場所・避難路の整備、住民に対する防災意識の向上などを進めておくことが肝要なのである。